

薬史学会通信

No. 15 1992年6月

● 113

東京都文京区本郷7-2-2
財学会誌刊行センター内
日本薬史学会事務局

石田純郎氏公開講演

ヨーロッパ医薬史跡散歩

—日本とゆかりのある史跡を中心に—(概要)

新見女子短大の教授であり、前オランダ・ライデン大学客員教授でもある本会々員の石田先生は、日本における近代医学のルーツについて、「ヨーロッパを歴史の目で直接に見て歩くと、従来言われてきた事柄と異なる、いわゆる等身大の医学・医療が見えてくる」と前置きされ、下記のような図を黒板に書かれて総括的なお話から始められた。

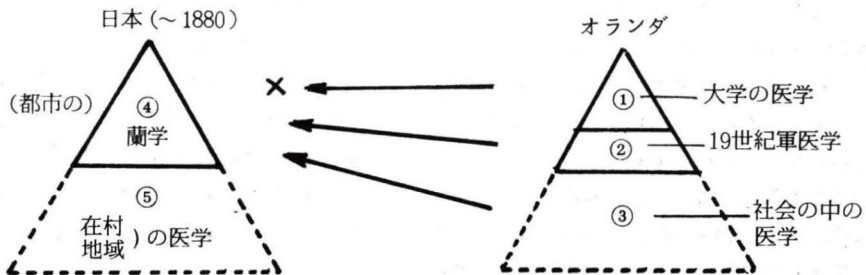
従来、日本の蘭学④はオランダの大学の医学①に由来するものと考えられてきたが、石田先生は19世紀軍医学②であることを発表されている(18・19世紀のヨーロッパ社会の構造と医療、実学史研究Ⅵ, 1990, 思文閣出版)。そしてその後の現地調査・研究の結果、ヨーロッパ中世以来、長い歴史の末に生み出された、社会の中の様々な医療関係職、たとえばQuack(巡回医)やギルド船外科医等による技術③が主流となって我が国に伝入され、日本の蘭学は哲学性・思想性の強かった古いタイプの大学の医学からは遠く離れていたことが判った(18世紀ヨーロッパの医療構造と蘭学、実学史研究Ⅷ, 1992, 思文閣出版)と話された。これに、愛知大学の田崎哲郎先生の

「在村蘭学の展開」(思文閣出版)⑤を含めて図式化されたのがこの表である。

石田先生は次に、東京大学薬学部に関係する2人の薬学者、プラッハ(P. C. Plugge 1847~1897, 在日は1876~78, 東京司薬場)およびエイクマン(J. F. Eijkman 1851~1915, 在日は1877~1885, 司薬場および東京大学製薬学科)について、オランダにおける戸籍、修學歷、職歴などを話され、当時がオランダにおける科学技術の社会的枠組み(パラダイム)の変換期であったことを示した。

科学技術の内容に関する時代区分として石田先生は、ルネッサンス期(1500~1600)および1770~1870(移行期)の2期をパラダイム転換期と把握し、その前後では同じ用語、例えば、学問、大学、病院、医師などの中味が全く異なるので、文献を調べる場合にも注意する必要があることを指摘された。

今回の講演では、絵画に見られる医師像などから当時の医療を説明するために、多数のスライドを使われ、今後の歴史研究のあり方について示唆に富んだお話をされた。



津山洋学資料館を訪ねて

末 廣 雅 也

今年度日本薬学会年会、薬史学会会場で配られた「日本の医史跡20選（監修・酒井シヅ）」に津山の洋学資料館が記されている。4月下旬所用で同地を訪ねた。

旧出雲街道の風情が残る町並は城下町特有の曲折がある。箕作阮甫旧宅を通り過ぎると丈の低い煉瓦塀の奥に町屋とは異なるユニークな建物が見えてくる。目指す洋学資料館だ。大正9年、妹尾銀行の店舗として池田豊太郎によって建てられたもので、使用目的に合わせて各地の高級材を取り寄せて造られた由で内部もどっしりとしている。津山在住の友人の好意で、下山純正学芸員より詳細な解説を伺いながら見学出来たことを感謝する。

本館内正面には津山が誇る宇田川、箕作両家を中心とした同地および当時の関係者の学統、家系が図示されている。

本館を出ると昔の銀行の金庫が活用された収蔵庫と煉瓦建ての陳列館がある。中庭の煉瓦の壁に宇田川家三代（玄随、玄真、榕庵）、箕作家二代（阮甫、秋坪）のレリーフが掲げられている。

陳列館に入って先ず目を瞠ったのは、陶製の大きなランビキ即ち江戸時代の蒸溜器具である。白梅の花を散らした絵模様で化学装置を超越した日本の美を觀賞することが出来る。

資料目録によれば、館蔵資料のほかに津山で古くからの医家・仁木家は貴重な文書、医療器具を多数寄託されている。それらの中には宇田川家伝来の薬筆筒、木製の経絡人形をはじめ、仁木永祐（1830-1902）所持の薬箱には当時使用された生薬が和紙に包装され、そのまま保存されていた。彼は江戸に赴き、箕作阮甫（1799-1863）、宇田川興斎（榕庵の養子）（1821-1887）に入門して医学を修

業した後帰郷し、医業のかたわら近在の子弟の教育にあたった。

医学書には「解體新書」をはじめ我が国で最初の内科教科書「西説内科選要」（玄随訳）、玄真訳の「醫範提綱」、「和蘭薬鏡」、「遠西醫方名物考」があった。玄真の訳書は同じ解剖学であっても「解體新書」よりも平易な記述になっている由。また「腺・腓」など今日我々が何気なく常用している文字は、彼が創案した「国字」であることも忘れてはならない。

榕庵（1798-1846）は医業のほかにも巾広い業績を残したが、西欧の植物学がそれまでの我が国の本草学より遥かに基礎科学的なことに気づいて著した「植学啓原」が陳列されていた。

我が国最初の化学書として有名な「舎密開宗」と墨痕鮮やかに和紙に記されたその訳稿は、永遠に残るであろう。日本語の元素名の幾つか（例：酸素）は彼が考案した。

榕庵は旺盛な知識欲の持主で、展示品の西洋カルタ（榕庵模写）や、西洋の楽器の精巧な絵には感嘆した。西洋カルタについては、「津山洋学資料第六集」に故水田昌二郎氏の詳細な記録があり、同館入場券にデザインされている。

阮甫および2人の養子、省吾（1821-1846）、秋坪（1825-1886）ゆかりの陳列品は「泰西名醫彙報」（我が国最初の医学雑誌）、和蘭文典、世界地図などが目を惹いた。箕作氏の一家が活躍した時代は、米・露両国の艦隊が相次いで来航した。博識かつ語学に才能のある蘭方医は、江戸幕府の人材スカウトで翻訳官として兵学、造船から外交交渉参画まで仕事

（8ページへ続く）

(11) 蘭学の勃興—宇田川家と薬物書

宗 田 一

『解体新書』の刊行(1774)以来、続々と翻訳された蘭方医書の主流は、紅毛流外科の伝統をふまえた外科系部門で、蘭方内科系は宇田川槐園(玄随, 1755~97)の『西説内科撰要』の翻訳・刊行, 1793年刊行開始)によって本格化する。

槐園の師・桂川甫周(1754~1809)には、わが国最初の洋方薬物訳書の『和蘭薬選』¹⁾があるが、未刊にとどまった。

槐園も『西説内科撰要』の関連において洋方薬物書を準備し刊行予告も行っているが、これまた未刊にとどまってしまった。

『遠西名物考』

本書は3巻本の伝写本として伝わり、自筆稿本も現存している。

槐園編のこの『遠西名物考』は、養嗣子榛斎(玄真, 1769~1834)と同榕菴(榕, 1798~1846)の『遠西医方名物考』(12篇36巻, 補遺3篇9巻)とよく混同されるのは、版心に「遠西名物考」の柱題名があり、また凡例にも「予か著ハス所ノ遠西名物考」とあるのが一因であろうか。

本書は巻1に28品目、巻2に19品目、巻3に8品目の計54品目の洋方薬物を収載していて、その収載順序は『西説内科撰要』に所出する薬物の順序と全く一致していることをもって、『西説内科撰要』を利用する上に必要な洋方薬物解説の性格をもって編纂されたことは明らかである。²⁾

『遠西医方名物考』

先にもふれた、宇田川家2代榛斎・3代榕菴によって編纂された本書は、『西説内科撰要』の増補重訂版である『増補重訂内科撰要』(1826年刊行開始)との関連で刊行されたもので、旧版の内科撰要の刊行時に配慮された『遠西名物考』が未刊にとどまったため、

前者の轍を踏まぬように、「重訂撰要」の刊行開始に先立って『遠西医方名物考』の刊行を準備し、僅か3カ年で大部の全巻(ただし補遺を除く)を完了したことは、当時の出版事情としては異常とも思えるスピード振りで、榛斎とその校訂に当たった榕菴の刊行にかけた熱意がうかがわれ、この刊行を終えた直後に改訂撰要の刊行が開始されたのであった。

宇田川三代にわたる薬物研究は、このように両「内科撰要」との関連において考察すべきで、内科に薬物は欠くことのできぬ関連をここに示している。³⁾

薬物同定の一例

両「内科撰要」の中で薬物名の訳名が変わっているものがある。

たとえば、旧版撰要で「苺菴」とあるのが「重訂撰要」では「セイムペイチュム根」となっている。これは、桂川甫周が洋薬セイムペイチュム(Symphytum, ムラサキ科コンフリ comfrey)に漢薬名の苺菴を当て、これが槐園の旧撰要にそのまま採用されたため、『遠西名物考』にもそのように載っている。

ところが、榛斎は「重訂撰要」でこの説を変えて、原名のセイムペイチュムに戻し『遠西医方名物考』にその薬名を提示したが、和名も漢名も与えていない。

榛斎はこれより以前に訳した『厚生新編』の担当項の訳文(1816)でオランダ名ビルセンコロイド(Bilzenkruid, ナス科)のラテン名ヘイヲセシアミエス(Hyoscyamus)として「苺菴の類」としているの、榛斎はヒヨス(現称)に苺菴を当てていたことが知れる。このようなヒヨス=苺菴説は、京都の蘭学者の藤林普山(1781~1836)も『ブランカールト本草』(未刊訳本)で採用している。

榛斎がその翌年に訳した別文では、「はし

りどころ」のルビに 莨菪の漢名を付して
いて、莨菪=ハシリドコロ説が本草家の間で定
着（小野蘭山『本草綱目』の影響）している
ことをうかがわせる。

前記のヒオス=莨菪説は、その後変更され
て『遠西医方名物考』にはベラドンナ=莨菪
説になっている。しかしヒオスはこの書には
収録されず、それが登場するのは「補遺（18
34）からではあるが、和名・漢名は与えられ
ていない。

また前記の藤林普山訳『ブランカールト本
草』の稿本の写しを入手して手を加えた榕菴
は、「ヘイオスシャムス、ビルセンコロイド、
莨菪、ヨメシルクサ」と記す普山の同定を訂
正して、「莨菪、ヨメシルクサ」の字を抹消
している。

普山が『（和蘭）薬性弁』でベラドンナに
莨菪を同定し、ヒオスシャムスに和名・漢
名を与えていないのは、このような江戸の蘭
学者の意見に従ったものであろう。⁴⁾

ちなみに、本書は文政5年（1822）の序文
があり、巻8には文政8年（1825）の奥付刊
記がある。これはのちにベラドンナ問題に関
与（散瞳薬として）してくる有名なシーボルト
事件が起こる前の日本の蘭学者、本草家の
同定の姿である。シーボルト説を有力視した
日本の医薬界では、ベラドンナ=ハシリドコ
ロ=莨菪説に拍車をかけ、この説がその後長
い間定着していたのはそのためだったのであ
る。

ちなみに、現在の中国でも、ハシリドコロ
類似のスコポリア属植物に「新莨菪」の漢名
を付し、ハシリドコロを「東莨菪」と呼んで
いるのは、日本の旧慣用名の影響によるもの
であろう。

わが国最初の製薬化学書

宇田川3代目の榕菴には、有名な『舍密開
宗』の訳編著があって、この書がラヴォワジ
エ化学の体系的紹介の最初の刊本⁵⁾として位
置づけられることは勿論ではあるが、日本の
化学（技術）が洋方薬物の製薬研究から本格

的に開始されていることを考えるとき、前述
の『西説内科撰要』の関連で訳された槐園の
『製煉術』（ブランカールト内科製煉術）は
未刊だったとはいえ、わが国最初の製薬化学
書といえる。

本書は、医家に必要な製薬技術の概要を当
時（ラヴォワジエ以前の旧）化学知識を以っ
て述べてあり、槐園は製薬に必要な（化学）
技術を“製煉術”の訳名で捉え、別に“銷煉
術”の語も使っているし、“鍊煉家”という
語もみえ、この製煉術に分離術〔分析〕と附
合術（または凝固術）〔合成〕の2つがある
ことを紹介しており、この訳名と化学の概念
はそれぞれ後代に大きな影響を与えている。

このように、化学技術への認識は、宇田川
蘭学初代の槐園にはじまり、榕菴へと3代に
わたって受け継がれていたのである。

和蘭局方

宇田川家3代が薬物書編纂に当たって、当
時のオランダ都市薬局方の類を活用し、次々
に出版される新版を組み入れ、とくに製薬面
に反映させた。当時の蘭方医家にとっては、
製薬の研究情報入手として局方類は欠かせぬ
ものとなった。

たとえば、既述の藤林普山『西医今日方』
（1847刊）の凡例に「……其古今局方書ニ載
テ、歴世経験セル製煉方劑ニ属スルモノヲ挙
テ、此篇ニ収録ス。……」とある。⁶⁾

『和蘭薬鏡』の性格⁷⁾

前述の『遠西医方名物考』よりも『和蘭薬
鏡』の書名から、この方を洋方薬物書として
のイメージを強く感ずる向きもあるが、『和
蘭薬鏡』は和漢薬としてもみられる同属植物
を基原とする洋方薬物を収め、洋方医学上に
必要な効能・用法用量等を記載した書物で、
日本になく従来知られることの少なかった洋
薬は『遠西医方名物考』の方に収めて両書を
区別し、2本建ての薬物書を榛斎・榕菴らは
刊行したのであった。

だから前述のように『遠西医方名物考』を
増訂版撰要の刊行準備中に出版し、その利用

の便をはかったのに対し、和漢にもある薬物を収めた『和蘭薬鏡』の方は遅れて刊行したのである。

もっとも、ここでいう『和蘭薬鏡』とは、新訂増補版(1828~35)を指し、18巻を8年を要して刊行したもので、元版の方は文政2年(1819)に3巻を出版しただけで中絶していたのである。

元版と新訂版とでは、個々の薬物の解説において、後者の方がはるかに詳しく内容が全く一新されている。

(注)

1) 原書は、フランス・パリで薬局を営んでいた薬剤師で化学者としても有名だったリムリ(Lémyer, Nicholas, 1645~1715)の薬物事典のオランダ訳本で、江戸の蘭学

者の間ではレメレイのドロゲレインの名で親しまれ、多くの著書に引用・利用されている。甫周には『ドロゲレイン本草記』の名の同一訳書もある。

- 2) 拙稿：『遠西名物考』の薬物〔その1〕, 医業ジャーナル, 26(3), p. 664~666, 1990.
- 3) 拙稿：宇田川家三代の実学(『西説内科撰要』と関連薬物書をめぐって), 実学史研究V, 1988.
- 4) 同書の目次, 巻21の麻薬の項参照。
- 5) 拙稿：世界の医療文化史(101), Pharma Medica, 9(11), p. 130~1, 1991.
- 6) 拙稿：日本薬局方制定前史(『日本薬局方百年史』所収), p. 3~8. 1987.
- 7) 拙著：『図説・日本医療文化史』思文閣出版, p. 200~02, 1989.

〔国際薬史学会開催のお知らせ〕

隔年に開催される International Conference on the History of Pharmacy の第36回総会が、明1993年5月3日~7日にドイツ・ハイデルベルグ市で開催される。

公式用語は、ドイツ、英国、フランス、スペインの4国語で、発表形式は、ポスター報告および口演(但し制限あり)で、主として下記のトピックを主題としている。

- (1) The development of the pharmaceutical industry: internal factors and effects on the distribution of pharmaceuticals
- (2) Unedited texts and documents concerning the history of Pharmacy
- (3) The history of pharmacy in the public

開会式の行事として、ハイデルベルグ城のローソク夕食会(Candle-light dinner)な

どが企画されている。

学会参加費は、会員D. M. 380, 同伴者はM. 350, 学生会員D. M. 230を予定会費としている。当国際学会の第2次公告は、本年9月に行われる予定である。

1994年に創立40周年を迎える当会では、その記念行事の一つとして本年から3年継続して、欧州の医薬史跡を訪ねる旅を実施しているが、明1993年は、この第36回国際薬史学会が開始される5月上旬のハイデルベルグ市に焦点をしばって、“ドイツの医薬史跡を訪ねる旅”を企画する予定である。当会々員の方も是非、当国際学会に出題されるなり参加されることを希望したい。

なお、当国際薬史学会は、“Geschichte der Pharmazie”を定期刊行しており、年会費はD. M. 45である。当会について資料を希望される方は、編集部へ連絡されたい。(Y)

日本薬史学会 総会等報告

1992(平成4)年4月18日(土) 12時30分より、東大医学部図書館地下食堂で、評議員会が29名の出席を得て開催され、本会運営についての意見が話し合われた。次いで本年度総会が、同薬学部3階記念講堂において開催された。

故野上寿前会長の後を受け、柴田現会長のもとで、任期2年の役員選出も行う節目の総会であった。

議事は柴田会長の進行により、まず、前年度事業報告と決算が提出され(第6ページ)次年度繰越額が年度内収入の1/2を越しているのは、1994(平6)年の創立40周年記念へ向けての諸行事に充当させる予定である旨報告された。

同案が了承され、続いて本年度事業計画と予算案が提出された(第7ページ)。運営方針としては恒常的事业である機関誌紙の内容強化を第一とし、40周年記念事業に対し、近代医薬品産業の発展史の編集と、西欧薬史学会との交流について年次計画で臨み、また94年の記念講演会への準備を開始する旨説明され、承認された。

最後に、'92~'93(平4~5)年度役員原案(7ページ)が承認され、続いて、会長より、宗田一、小山鷹二、江本龍雄の3先生を名誉会員として推薦する件が提出され、万場一致で承認、丁度総会に出席されていた江本先生に、柴田会長より、推薦書状が手渡された。

会合はそのまま公開講演(前ページ)となり、終了後、医学部図書館地下で懇親会が開催された。

平成3(1991)年度 決算表 単位 円

(収入の部)	前年度予算	本年度決算	増減 Δ
前年度繰越	1,977,550	1,977,550	0
賛助会費	1,020,000	870,000	Δ150,000
一般会費	1,200,000	1,435,000	235,000
学生会費	10,000	8,000	Δ 2,000
外国会費	20,000	0	Δ 20,000
投稿料	500,000	1,039,002	539,002
広告料	80,000	120,000	40,000
雑誌販売	10,000	9,000	Δ 1,000
雑費	10,000	5,356	Δ 4,644
利子	5,000	26,665	21,665
寄附	0	0	0
合計	4,832,550	5,490,573	658,023

(支出の部)	前年度予算	本年度決算	増減 Δ
機関誌紙発行費	2,320,000	1,922,107	Δ397,893
編集費	120,000	0	Δ120,000
印刷費	2,050,000	1,859,950	Δ190,050
発送費	150,000	62,157	Δ 87,843
事業費	300,000	104,480	Δ195,520
講演会開催費	100,000	15,170	Δ 84,830
文庫運営費	50,000	50,110	110
西部支部費	50,000	0	Δ 50,000
予備費	100,000	39,200	Δ 60,000
管理・事務費	410,000	362,653	Δ 47,347
総会運営費	20,000	12,575	Δ 7,455
事務委託費	120,000	0	Δ120,000
名簿管理費	50,000	107,230	57,230
幹事会運啓費	100,000	74,177	Δ 25,823
通信費	20,000	71,420	51,420
事務用品費	50,000	75,810	25,810
雑費	50,000	21,441	Δ 28,559
合計	3,030,000	2,389,240	Δ640,760
次年度繰越額	1,802,550	3,101,333	1,298,783

日本薬史学会・平成3(1991)年度 活動概要

- ◎平成3(1991)年4月20日、総会(東京大学薬学部記念講堂)；新会長に柴田承二東大名誉教授を選出
総会講演；北川千恵子氏(サンド薬品㈱)
「アジア地域における医療史」
会長就任講演；「柴田承桂と日本薬学の発祥」
- ◎事務所を(財)学会誌刊行センター(東京都文京区本郷7-2-2)に移転
- ◎機関誌紙の発行
薬史学雑誌・第26巻；No.1(6月30日)
" No.2(12月30日)
薬史学会通信；No.13(11月)，No.14(平成4年2月)
- ◎集談会「近代西欧における化学・薬学と日本の薬学」；平成3年11月30日、北里大学薬学部白金校舎、視聴覚教室
「薬学教育を通してみたフランス薬学」辰野高司氏
「イギリスの薬学—その歴史的発展」名取信策氏
- ◎「ヨーロッパ医薬史跡を訪ねる旅」の企画

平成4(1992)年度予算(案) 単位 円

(収入の部)	前年度予算	本年度予算	増減 Δ
前年度繰越	1,977,550	3,101,333	1,298,783
賛助会費	1,020,000	1,020,000	0
一般会費	1,200,000	1,200,000	0
学生会費	10,000	10,000	0
外国会費	20,000	20,000	0
投稿料	500,000	500,000	0
広告料	80,000	80,000	0
雑誌販売	10,000	10,000	0
雑費	10,000	10,000	0
利子	5,000	5,000	0
寄附	0	0	0
合計	4,832,550	6,131,333	1,298,783

(支出の部)	前年度予算	本年度予算	増減 Δ
機関誌紙発行費	2,320,000	2,320,000	0
編集費	220,000	120,000	0
印刷費	2,050,000	2,050,000	0
発送費	150,000	150,000	0
事業費	320,000	950,000	630,000
総会運営費	20,000	50,000	30,000
講演会開催費	100,000	100,000	0
文庫運営費	50,000	50,000	0
西部支部費	50,000	50,000	0
予備費	100,000	200,000	100,000
記念行事企画・運営費*		150,000	
日本製薬工業発展史編集費*		150,000	
印刷補助費*		200,000	
管理・運営費	390,000	490,000	100,000
事務委託費	120,000	120,000	0
名簿管理費	50,000	50,000	0
幹事会運営費	100,000	100,000	0
通信費	20,000	100,000	80,000
事務用品費	50,000	50,000	0
入送金手数料		20,000	20,000
雑費	50,000	50,000	0
合計	3,030,000	3,760,000	730,000
次年度繰越額	1,802,550	2,371,333	568,783

(* 創立40周年記念事業)

平成4(1992)年度事業計画

- (1) 機関誌紙編集企画の充実、強化
近隣学会(科学史、医史、化学史など)の情報紹介
- (2) 日本薬史学会創立40周年記念事業・1994(平成6)年10月
 - ① 日本製薬工業発達史編纂3年計画
1992(平成4)年度 第2次大戦まで
1993(平成5)年度 第2次大戦以降
1994(平成6)年度 総括
 - ② 西欧薬史学会との交流(機関誌交換)
1992(平成4)年5月 イギリス、フランス訪問
1993(平成5)年5月 国際薬史学会参加(ハイデルベルグ)
1994(平成6)年度 オランダ、ほか訪問
 - ③ 記念講演会(1994年10月)企画
- (3) 会則の見直し

平成4～5年度役員

会長

柴田承二

幹事

青木允夫、石坂哲夫、

大槻真一郎、杉原正泰、

滝戸道夫、辰野高、長沢元夫、

難波恒雄、米田該典

(事務担当)

山田光男、川瀬清、末廣雅也

監事

田辺普

名誉会員

木村雄四郎、吉井千代田、

根本曾代子、宗田一

小山鷹二、江本龍雄

評議員

天野宏、市川正孝、井上隆夫

井上哲男、岩井鑽治郎

岩崎由雄、遠藤浩良、小原正明

奥田潤、奥田拓男、大塚恭男

金久保好男、金庭延慶

北川勲、喜谷喜徳

木村真太郎、岸本良彦

久保道徳、小曾戸洋、小林凡郎

三川潮、清水正夫、正山征洋

高橋文、高島英伍、田端守

滝野吉雄、富松利明、名取信策

中川富士雄、中村健

中室嘉祐、浜田善利、播磨章一

平賀敬夫、久道周次、藤井正美

藤村一、古谷力、堀岡正義

堀越勇、松本仁人、水野瑞夫

三沢美和、宮崎正夫、森田直賢

山内辰郎、山川浩司、山崎和男

山崎幹夫、山田健二、山田久雄

吉岡信、渡辺徹、渡辺楷

「近縁学会紹介」

日本医史学会

先般、順天堂大学医史学教室に酒井シヅ教授をお訪ねし、その沿革、概況などにつき伺う機会を持たせてのご紹介する。

日本医史学会の創立は、1927(昭和2)年12月であるが、そのルーツは1892(明治25)年にさかのぼる。この年の3月4日に私立奨進医会によって「医家先哲祭」が東京で初めて開催され、これが第45回(1936-昭和11年)まで続いた。

この3月4日という日は、日本の医学史にとって重要な意味をもっている。即ち1771(明和8)年のこの日に、杉田玄白、前野良沢らが、日本で初めて江戸千住骨ヶ原(小塚原)で腑分けに立会っており、わが国の近代西欧医学への幕明けともいべき記念すべき日である。この翌日すなわち3月5日には、良沢の宅で、玄白らがターヘル・アナトミア

の翻訳に着手している*。

前述の「医家先哲祭」は、1928(昭和3)年3月から日本医史学会が主催するようになり、現在はこれが年1回の総会に代っている。なお、現在も3月4日には医史学会幹部の方々が、千住回向院に参詣されている由。

現在、日本医史学会の会員数は、約900名で、機関誌年4回、会報1回を発行している。会員は、医師のほか、歯科医師、薬剤師および植物学史、科学史に興味をもつ人も会員になっている。研究発表会としては、年1回の総会および、毎月第4土曜日の午後の例会を年9回開催している。会費は入会金2,000円、年会費10,000円である。

本年は第93回日本医史学会が第20回日本歯科医史学会と合同で、総会および学術大会を6月5・6日の両日、日本大学講堂(東京)で開催された。

* 蘭学事始 杉田玄白、緒方富雄註、岩波書店 1979(昭54) (山田光男)

編集後記

1994年の、本学会創立40周年記念行事が始まっています。

第一回ヨーロッパ医薬史跡の旅は、末廣幹事ら一行16名の編成で、5月23日出発、ロンドン、パリを周って無事帰国されました。とくにパリのHotel-Dieuでは、フランス薬史学会々長も交歓会に出席され、特別な便宜を計って頂きました。いずれ集談会の席で報告を伺いたいと思っております。

その他、医薬品産業発達史の編集なども検討が進められています。薬史学会の発展につき、会員各位のご支援をお願いいたします。

(2ページより続く)

松陰が萩の野山獄で差入れを望んだという。明治以後、箕作家の血をひく人々から多くの大学教授が輩出した。

このほか、華岡流の外科を学んだ久原洪哉(1824-1896)は藩侯夫人の乳癌治療を行いその子躬弦は真進生として大学南校で学び、後に京大総長、日本化学会会長を勤めた。

葉桜の美しい城跡で櫓のあった石垣に佇ち天守閣は明治6年とりこわされたが、新政府の鎮台とならなかったことが、戦火にも遭わずにこれだけの文化財を今日まで保存できたのではないかと、しばし感慨に耽った。

薬史学会々費を前納下さい

一般：(年) 5,000円、 学生：(年) 2,000円
振替口座、 東京2-67473、 日本薬史学会